

Sons and Lovers

—精神面における母親の支配と息子の
アイデンティティ・クライシス—

吉 田 一 穂

序

Sons and Lovers (1913) は、D. H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) の3番目の小説であり、彼の生涯の中で最も好評を得た作品の一つである。作品は、1913年5月、ロレンスが27歳のときに出版され、一財産つくることはなかったものの、ロレンスの作家としての名声を確立した。

ロレンスは2年間かけ、4回の試みの末、作品を完成させた。たった100ページの最初の草稿は、1910年10月から11月までロレンスがクロイドン (Croydon) の教師をしていたとき書かれた。彼はさらに分量を増やした第二草稿を1911年3月から7月まで、そして第三草稿を1911年11月から1912年6月まで書いた。1912年8月、ロレンスは再び本として作品を書き上げる決心をし、10月にタイトルを *Paul Morel* から *Sons and Lovers* へと変更した。最終的に、1912年11月彼は、北イタリアからロンドンのダックワース (Duckworth) 社へ4番目の原稿を送った。クロイドン時代にロレンスの友となり、彼を励ましていたダックワース社のエドワード・ガーネット (Edward Garnet, 1868-1937) は、¹ 原稿が長すぎると判断し、80箇所を消し去った。1913年から1992年まで印刷されたのは、この短くなった小説である。

Sons and Lovers は、しばしば、自伝的小説と考えられる。事実、作品にはロレンスの自伝的部分との類似点が見られ、多くの批評家は、ポール・モレル (Paul Morel) をロレンスの自画像と考えている。また、ダレスキー (H.

M. Daleski)も、「ポールと母親と父親との関係の描写は、ロレンス自身が両親に対していかに感じていたかの信頼できる手がかりである」と述べている (Daleski 43)。最近では、自伝的部分との相違点も指摘されているが、作品の女主人公ミリアム (Miriam) のモデルがジェシー・チェインバーズ (Jessie Chambers, 1887-1944) であることが知られているように、² 作品をロレンスの自伝的部分を抜きにして考えることはできない。³

一方で *Sons and Lovers* は、主人公ポールが心の中の葛藤と闘うことから教養小説 (Bildungsroman) との関連で論じられることがある。教養小説とは、主人公が困難な環境と闘ったりしながら、自己を完成させていく過程を描く小説である。19世紀のチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の *David Copperfield* (1850) は、一般に教養小説と考えられているが、ロレンスは *Sons and Lovers* において *David Copperfield* とは異なる母親と息子の関係を提示している。*David Copperfield* では、主人公のデイヴィッドはマードストーン (Murdstone) 姉弟の家庭への介入や母親の死により、無意識に母親の面影を追求める一方、⁴ *Sons and Lovers* では、ポールが精神面において母親に支配されるがゆえに女性との関係において悩み苦しむ点で、両作品は異なっていると言える。ポールのアイデンティティ・クライシスについては、彼の家庭環境が密接に関係していると考えられる。ロレンスは、家庭環境が主人公にいかなる影響を与えているかを克明に描き出している。現在に至るまで、母親に精神的に支配されるポールについて論じた論文は多いが、家庭環境とポールの成長過程との因果関係が十分に考察されてこなかったように思われる。特に、母親の影響を強く受け、母親の望む中産階級としてのアイデンティティを持つようとするがゆえにポールが陥るアイデンティティ・クライシスについては、詳述されていないように思われる。そこで、本論文では、家庭環境とポールの成長過程との因果関係に注目しつつ、精神面における母親の支配がいかに息子をアイデンティティ・クライシスへと追いやっているかについて論じてみたい。

1. ポールの家庭環境

ロレンスは、1912年11月に4番目の原稿を完成させ、それをエドワード・ガーネットに送る。その際、手紙でプロットについて説明している。その手紙には次のように書かれてある。

It follows this idea: a woman of character and refinement goes into the lower class, and has no satisfaction in her own life. She has had a passion for her husband, so the children are born of passion, and have heaps of vitality. But as her sons grow up she selects them as lovers—first the eldest, then the second. These sons are urged into life by their reciprocal love of their mother—urged on and on. But when they come to manhood, they can't love, because their mother is the strongest power in their lives, and holds them. . . As soon as the young men come into contact with women, there's a split. William gives his sex to a fribble, and his mother holds his soul. But the split kills him, because he doesn't know where he is. The next son gets a woman who fights for his soul—fights his mother. The son loves the mother—all the sons hate and are jealous of the father. The battle goes on between the mother and the girl, with the son as object. The mother gradually proves stronger, because of the tie of blood. The son decides to leave his soul in his mother's hands, and, like his elder brother, go for passion. He gets passion. Then the split begins to tell again. But, almost unconsciously, the mother realises what is the matter, and begins to die. The son casts off his mistress, attends to his mother dying. He is left in the end naked of everything, with the drift towards death. (*Letters 1*, 476-77)

小説の概要はこうです。高潔で上品な一人の女性が、結婚して下層階級に入りますが、彼女は自分の人生に満足を得られません。彼女は夫に対

して情熱を抱いていました。したがって、子供たちの誕生は情熱によるものと言えます。実際、彼らは生命力にあふれています。ところが、息子たちが成長するにつれ、彼女は息子たちを恋人として扱うようになります。最初は長男、次に次男を。息子たちは母親を愛し、また母親から愛され、世の中へと駆りたてられます。…ところが、成長した彼らは母親以外の女性を愛することができないのです。なぜなら、母親が彼らの生活の中で最も大きな影響力を持っており、彼らをつなぎ止めているからです。…この若者たちは、女性に出会うと、たちまちのうちに分裂が生じるのです。ウィリアムは、浅薄な女性と性関係を持ちますが、母親が彼の魂をしっかりと捉えているのです。そして、その分裂のために彼は死んでしまいます。自分のいるべきところが分からなくなったからです。次男が出会う女性は、彼の魂を求めて闘います。すなわち、彼の母親と闘います。——息子たちは、すべて父親を憎み嫉妬しているのです。息子を巡る母親と女性の闘いが続きます。しだいに、母親は血の絆ゆえに、その力を発揮していきます。息子は魂を母親の手にゆだねることを決心し、兄と同様に情欲へと向かい、それを手に入れるのです。そのとき再び例の分裂が起こり始めます。ところが、ほとんど無意識に母親が事態の本質に気づき、死へと向かい始めます。息子は愛人と別れ、死にゆく母親に付き添います。最終的に息子は、あらゆるものとの関係を失い、死へと漂っていくのです。

さらにロレンスは付け加えて、作品について「何千ものイギリスの若者の悲劇である」と説明している。作品における息子たちの悲劇の原因は、ロレンスが手紙において示しているように、あまりに母親が息子たちを精神的に支配したことにあるだけでなく、さらにさかのぼると、父親と母親の結婚とその後の家庭環境にもある。父親のウォルター (Walter) と母親のガートルード (Gertrude) は、クリスマス・パーティーで出会い、結婚する。最初両者は、自分にはないものを相手に見出して互いに魅力を感じている。10歳から炭

坑で働いていた坑夫のウォルターにとって、ガートルードは神秘と魅惑そのものの淑女であり、彼に話しかける彼女の言葉は、南部イングランドの発音であり、英語の粋であり、彼の体をぞくぞくさせる。⁵ 父親の如く高潔な清教徒であり、宗教的、道徳的に厳格なガートルードは、自由な思考や精神が妨げられ、捕えられて白熱してしまう。それだけでなく彼女は、自身の生き方とは異なる生き方をするウォルターに関し、「肉体からろうそくの光のように流れ出す、ウォルターの生命の炎のくすんだ黄色の柔らかさ」(18)を「すばらしいもの、自分の及ばないもの」(18)のように思い、魅力を感じてしまう。⁶ このように互いにはないものに引きつけられて結婚した二人ではあるが、根本的に相いれない部分があることから、二人は不調和となる。ロレンスは、「夫と妻との一方が死ぬまで終わることのない戦いが始まった」(22)と表現している。ウォルターの性質は全く官能的であるが、ガートルードは、そのような夫を道徳的、宗教的な人間にしようと懸命になり、仮に夫が宗教上の罪を犯すことがあると、彼を責め、苦しめる。また酔っぱらったり、嘘をついたり、卑怯なことをしたり、家庭を顧みなかったりすると、無慈悲に鞭をふるうようになる。

注目に値することは、ロレンスが組合教会派の牧師ヒートン (Heaton) 氏の訪問に際し、ヒートン氏とガートルードをウォルターとガートルードと対照的に調和的に描いていることである。妻が初産のときに死んだので、一人牧師館に住んでいるヒートン氏は、ケンブリッジ大学の学士である。モレル夫人 (ガートルード) は、彼のことを好むようになる。もともとモレル夫人は、教育のある男と宗教や哲学について話し合うことが好きだったので、当然のことと言える。二人はある日、カナの婚礼について議論する。ヒートン氏は「イエスがカナで水をぶどう酒に変えたのは、それは、今までは水のように靈感をうけていなかった夫妻の日常生活や、その血までもが、聖霊に満たされ、ぶどう酒のようになることの象徴なんです」(45)と言う。モレル夫人は、心の中で妻が亡くなったので、ヒートン氏が自分の愛情を聖霊にしてしまうのだと考える。一方で、モレル夫人がウォルターとの生活において、

イエスの奇跡のように新たに生まれ変わるなど想像もつかないことなのである。

ヒートン氏とモレル夫人がカナの婚礼について話しているそのとき、ウォルターが帰ってくる。ヒートン氏は、握手をしようとして立ち上がるが、ウォルターは、自分の手を見せながら、「いいや、これを見なよ。こんな手と握手したくないでしょう。どうです。つるはしみたいに固くてシャベルの汚れがついているんだ」(46)と言う。*Sons and Lovers* におけるこの場面とよく似た場面をロレンスは、後の短編 *Jimmy and the Desperate Woman* で描き出している。この短編は、1924年10月号の *The Criterion* に掲載されたもので、⁷ ロンドンのインテリ一流雑誌編集長が手紙と詩を当てにして炭鉱夫の妻を劣悪な環境から救い出そうとする物語である。⁸ この作品において最初のあいさつに、「はじめまして」(118)と言いながら片手をさし出すジミーに対し炭鉱夫は、「この手じゃ握手もできんので。おかけになって」(118)と言う。このような炭鉱夫の反応を描写することにより、ロレンスは、両作品において炭鉱夫の家に全く異質な他者が介入してきたことを効果的に示している。

ただ、両作品において気づかざるを得ないことは、*Sons and Lovers* においては、牧師のヒートン氏とモレル夫人、そして、*Jimmy and the Desperate Woman* においては、インテリ一流雑誌編集長のジミーとロザラム (Rotherham) 大学で教員免許を取得し、結婚前に学校教師をしていたピネガー (Pinnegar) 夫人の方が調和的關係にあり、炭鉱夫の方が異質な人間のように描かれていることだ。すなわち、両家庭において肉体労働者と知的な女性は互いに異質な存在であるがゆえに、たとえ、相手に自分にはないものを発見し、魅力を感じたとしても、⁹ 最終的に不調和になるという悲劇の根本原因を持っているように描かれている。酔っぱらって帰ってくるウォルターは、妻に対し、「お前も他の女たちがやっているように、立ち上がってだんなに給仕するのが当然じゃないか」(53)と言い、ピネガーも妻に対し他に女を作りながら、「おまえには、主婦としての勤めを果たしてもらいさえすりゃ

いい」(123)と言うので、二人の炭鉱夫は男性優位主義者であると言っている。ただ、モレル夫人は、夫の言葉を理不尽であると退ける。いわば、家庭の中において感情と理性、聖と俗といった対立概念が同居しているが、互いに反発し合っていると言っている。

Sons and Lovers において、夫と妻の対立は、子供の成長過程において決定的なものとなる。モレル夫人は、共同購買組合に付属する婦人クラブに入り、協力することで手に入る利益のことや、その他の社会問題についての話し合いに参加する。子供たちは、新聞を読んだり、すらすら書きものをしたり、考えたり、本を調べて書く母親に深い尊敬を感じる。ウィリアム(William)が13歳のとき、モレル夫人は組合事務所の仕事を彼に見つけてやるが、ウォルターは「ウィリアムを椅子にすわるやつなんかにして、どうしようってんだ。あいつは、ズボンの尻をすり減らすだけで、かせげやしねえぞ」(70)と言う。このようなウォルターに対しモレル夫人は、息子を炭鉱で働かせる気がないことを伝える。ウィリアムは速記と簿記を身につけ、ベストウッド(Bestwood)の中産階級の人々と交わるようになる。ロレンスは、ベストウッドの中で一番地位の高いのは聖職者、その次が銀行の支配人、次が医者、そしてその次が大勢の炭鉱夫であると説明している。ロレンス自身が暮らしていたイーストウッド(Eastwood)に住み着いた人々は、産業労働者階級の中でも比較的恵まれた人々で、苛酷で危険にもかかわらず、比較的報酬のいい炭鉱業で生計を立てるためにそこへやってきたのである。その町から楽に歩いて行ける範囲内に10の炭鉱があった。イーストウッド地区の炭鉱夫の賃金は、1850年代から1914年にかけて二倍以上にも増えた(ワーゼン 46)。

しかし、ここで気づかざるを得ないことは、モレル夫人がウィリアムを肉体労働者ではなく、ホワイトカラーの人間にしようとしていること、すなわち、父親以上の階級の人間にしようとしていることである。いわば、モレル夫人は家庭の中において、労働者階級である父親以上の階級に息子を押し上げることにより、父親の権威を失墜させることとなる。それは家庭内におけ

る階級的分裂と言ってもいい。さらに父親自身の行い、すなわち、家の中でどなり散らしたり、酔っぱらったりすることが彼自身の家における立場を悪くし、子供たちは彼を嫌い、ポールは、「お父さんにお酒をよさせてください」(85)と毎晩祈るようになり、しまいには、「神さま、お父さんを死なせて下さい」(85)と祈るまでになる。父親が足の骨折で入院したとき、ポールは父親がまもなくもどって来ることを残念に思い、父親が死んだら小さな家に母親と暮らして、絵をかいたり、好きなところへ行ったりして、いつまでも幸福に暮らすという願望すら抱くようになる。

父親の権威が失墜していく一方、母親はますます息子たちの感情や向上心や精神的傾向に支配的影響力を持つようになる。ドロシー・ヴァン・гент(Dorothy Van Ghent)は、「子供たちが大人になるとき、家庭の中のかつての分裂が性格の中の分裂として新しい形で顕現化する」と指摘している(Ghent 6)。その分裂はまず兄のウィリアムに現れる。

ウィリアムの生活は派手になり、彼はロンドンに出、ベストウッズの友だちよりずっと高い社会的地位の人々と交際できることを知り、ベストウッズでならば近寄り難い存在である銀行支配人を見くだし、教区長を自由に訪問するほどの地位の人々の家を訪問したり、そこへ泊まったりするようになる。さらに彼は、ルイザ・リリー・デニス・ウェスタン(Louisa Lily Denys Western)と交際することになる。リリーは、ウィリアムの家族に会いに来たとき、貴婦人のように振る舞い、女王のような態度をとる。ウィリアムは、リリーと母親を比較し、真剣なところがなく、浅薄で躰がされていないと感じ、心の伴侶としてはふさわしくないと感じる。

しかしながら、シュラップ(E. S. Shrub)が指摘しているように、ウィリアムがリリーに対し中産階級の持つ性的魅力に引きつけられていることは事実であり、父親が以前母親に対して夢中になったことの繰り返しが見られる(Shrub 118)。労働者階級の男性にとって中産階級の淑女は神秘と魅惑の存在なのだ。いわば一家の中に中産階級と労働者階級が分裂したまま同居していたが、母親の影響を強く受けたウィリアムは、心の中で労働者階級ではな

く中産階級としてのアイデンティティを選択しようとし、伴侶にも無意識に中産階級としての教養を求める。

このようなウィリアムの試みは、リリーが中産階級としての教養を身につけていないがゆえに失敗に終わる。母親に対しリリーが生まれてから一冊も本を読んだことがないとウィリアムが説明するとき、皮肉にもウォルターが「おれみたいだな」、「本を鼻さきに置いてすわっていても、何が書いてあるかわからないなんて、おれと同じだ」(160)と調子を合わせて言う。リリーが本を理解できないことは、リリーが表面上では中産階級のように見えながら、ウィリアムの母親と同じような教養を持たず、教養に関してはウィリアムの理想とする中産階級の知的水準に達していないことを示している。

ウィリアムは、中産階級として生きようとしていたが、伴侶としようとしていたリリーが中産階級としての水準に達していないことから、理想を実現することができず、中産階級と労働者階級の間でアイデンティティ・クライシスに陥る。ウィリアムは肺炎と丹毒によって恐ろしい発作をおこして死ぬが、ロレンスはあたかもウィリアムが内的緊張によって死んだような印象を与えている。兄ウィリアムの悲劇は、いわば家庭環境がもたらした悲劇と言っている。弟ポールの場合にも意味合いは異なるが、同様の繰り返しが見られる。それを以下見ていきたい。

2. ポールに対する母親の影響

гентは、「ポールの最初の女性ミリアムは、知的なタイプの女性で、彼女の母親的なものが、ポールの感情において支配的なものに対し、対立関係となる」と指摘している(Ghent 6)。гентが述べているポールの感情において支配的なものとは、生の衝動と言ってもいいが、ポールの生の衝動がミリアムの中の母親的側面、すなわち理性的側面に対し、対立関係となるのだ。モレル夫人が清教徒の家門から受け継いだ高い道徳意識を持ち、宗教的感情を持っているが如く、ミリアムも宗教的感情を持ち、ポールとの関係において神を介入させる。ミリアムは、「もしわたしがポールを愛さなければなら

ないというのがあなたの思し召しなら、わたしがあの人を愛するようにしてください——人々の魂を救うために亡くなったキリストのように」(208)と
 言い、犠牲となって多くの人間の魂に最高の至福を与えたキリストのように、
 自分を犠牲にする恍惚感に陥る。ミリアムの考える愛は、このように全く精
 神的なものであるが、ポールは、ミリアムのほしがっているのが、彼の肉体
 から離れた魂であり、彼自身でないと感じる。母親とミリアムには両者とも
 宗教的感情が見られ類似点が見られるが、ポールとミリアムの関係は、母親
 がポールに大きな影響力を持っているがゆえにうまくいかなくなる。シュラッ
 プが指摘しているように、どんな愛もポールにとって完全なものとなりえず、
 母親との関係がうまく他の女性との愛情関係へと移行しないのだ (Shrubb
 128)。ロレンスはポールに対する母親の影響を次のように説明している。

He had come back to his mother. Hers was the strongest tie in his life. When he thought round, Miriam shrank away. There was a vague, unreal feel about her. And nobody else mattered. There was one place in the world that stood solid and did not melt into unreality: the place where his mother was. Everybody else could glow shadowy, almost non-existent to him, but she could not. It was as if the pivot and pole of his life, from which he could not escape, was his mother. (261)

彼は母親のところへもどって行ったのだ。母親こそ、彼の生活の中で彼をつなぎ止める最も強いきずなだった。彼がその点を考えこむと、ミリアムの姿は力を失ってしりぞいてしまう。彼女には何か漠然とした、現実離れしたものがあつた。そしてほかには問題になる人間はなかつた。確固とした、現実を失うことのない場所が、この世に一つだけあつた。それは母親のいる場所であつた。他の者はいつか、影のようになり、彼にとってはいないも同然になってしまうのだったが、彼女だけはそうはならなかつた。母親は彼の生活の軸か極のようなものであり、そこから

彼は逃れることができなかった。

引用において見られるように、母親は彼の人生の軸か極のようなものであり、そこからポールは簡単に逃れることはできないが、母親の価値観への反発が見られる。モレル夫人は、ポールが中産階級の中に入って行くことを望んでいるが、ポールは裕福な中産階級の人間になりたくないと感じる。彼は、「人間の違いは、その人の階級にあるのではなくて、その人自身の中にあるということなんだ。中産階級が与えるものは観念だけれど、庶民には一生懸命そのもの、あたたかさがある。彼らの中にいると憎しみも愛も実感できるからね」(298)と言う。ポールの言葉は、彼が母親の望む中産階級としてのアイデンティティを持つ一方、そのアイデンティティでは生を感じることができない、生を感じるには、父親と同じ労働者階級としてのアイデンティティを持つ必要があるのではないか、と感じていることを示している。いわばポールの中では、中産階級と労働者階級、母親と父親が対立関係にあり、彼はアイデンティティ・クライシスに陥る。ジェイムズ・C・カワン (James C. Cowan) は、「ポールの願望は、深刻で憂鬱な苦悩はあるものの、母親の要求を満たす方向に向かう」と述べている (Cowan 130)。ポールの状態は、母親の要求を満たす過程において、父親の階級と生の実感を関連づけるがゆえに、それが邪魔になって苦悩している状態である。

ところで、19世紀の小説 *David Copperfield* において主人公のデイヴィッドが父親がいないがゆえにこのようなアイデンティティ・クライシスとは無縁であることは注目に値する。さらにデイヴィッドの場合、母親が途中で死んでしまうがゆえに、「天涯孤独」(123)と感じるものの¹⁰、自身の中で母親と父親が対立関係になることはない。*David Copperfield* は回想形式をとり、ヒーローが独立する姿をはっきりと読者に印象づける。ただ、その独立に関し注意を要する点がある。人間の独立について考えるとき、精神的独立と社会的独立とが考えられる。デイヴィッドの成長過程において重要なのは精神的独立の方である。少年デイヴィッドは、マードストーン姉弟の介入により、無

理やり母親との関係を引き裂かれ、その後、母親の死という境遇の変化により、やむを得ず母親から独立をせざるを得ないからである。

ただ見落としてはならないことは、マードストーン＝グリーンビー商会での苦しい時期の後、デイヴィッドが「第二の母親」(346)と認めている伯母ベッチー・トロットウッド (Betsey Trotwood) の庇護の下、精神的に比較的安定した生活を送ることである。アンドルー・サンダーズ (Andrew Sanders) は、「たとえ決断や意見において因習にとらわれず、個性的であったとしても、ベッチーは、ディケンズが女性において最も尊んだもの、すなわち、安息の地たるよりよい家庭を作るという天与の才能の化身と言ってもいい」と述べている (Sanders 79)。彼女は、デイヴィッドの家庭作りだけでなく、教育にも貢献している。ベッチーは、カンタベリーの学校に入る前、「卑劣なことをしないこと、嘘は言わないこと、それから、情け知らずのことはしないこと。この三つの悪は絶対に避けることね」(224)と言う。この教えは、*Tom Brown's Schooldays* (1861) でトムがパブリックスクールのラグビー (Rugby) 校に入る前に、彼の父親が言う言葉に似ている。なぜならば、トムの父親はトムに、「嘘を言わず、いつまでも勇敢で親切な気持ちを忘れるな」(72)と言うからである。¹¹ この教えは、トムの父親の「息子が勇敢で、役に立つ、嘘を言わぬ英国人になり、紳士になり、キリスト教徒になってくれれば何も言うところはない」(74)という考え方に基づいている。このことから *David Copperfield* のベッチーの教えは、デイヴィッドの人格形成においてトムの場合と同じように役立つと言えよう。さらに、女性との関係において、アーリン・M・ジャクソン (Arlene M. Jackson) が指摘するように、デイヴィッドがドーラの中にかつての母親を見、無意識に母親への思慕から彼女を求めたとしても (Jackson 62)、母親が生きていないがゆえに女性との関係において母親が障害になることはない。

また、ディケンズが影響を受けたトマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) の *Sartor Resartus* (1833-34) の主人公トイフェルスドレック (Teufelsdröckh) もまた捨て子であるがゆえに、12歳のときに育ての母親グ

レトヘン・フッテラル (Gretchen Futral) から事実を知らされたとき、それは「少年らしい感情と空想に消えることのない印象を与えた」(66)と述べるものの、¹² 自身の中で母親と父親が対立関係になることには無縁である。これらの二つの作品は、途中でヒーローが孤児となるがゆえに、ポールと同じ心理状態を経験することはないのである。

話を元に戻そう。*Sons and Lovers* においてポールのアイデンティティ・クライシスに陥った状態は、ミリアムとの関係においてさらに顕著になる。第11章においてロレンスは、ポールにはミリアムとの関係において障害があり、彼が肉体関係のことを考えるとひるんでしまい、ミリアムに内面的に束縛されていると感じていることを説明している。第11章のタイトル「ミリアムの試練」(“The Test of Miriam”)は、アイロニーに満ちている。なぜならば、ルイス・L・マーツ (Louis L. Martz) が指摘しているように、この章は、ポールが感じてはいるが理解していない監禁状態から自由になれるかどうかという彼自身の能力に関する試練を提示しているからである (Martz 68)。その試練とは、ミリアムに対してポールが母親に対する父親の如くなれるかどうかという試練と言ってもいいが、ポールは、父親が母親の神聖さを、理性のない獣のように踏みじめるのを見ていたので、内気に遠慮がちになりすぎ、女性から非難されるくらいなら自分の欲望を殺してしまおうとする。

ロレンスは、ポールの家庭環境と母親がいかに彼の女性との関係において影響を与えているかという因果関係を明示している。ポールはミリアムに「きみはきみを崇拜する男と結婚すべきだ」、「そうすれば、きみは好きなようにその男を扱える。もしきみがそういう男たちの内的な生活をつかまえれば、たくさんの男たちがきみを崇拜すると思うよ。きみはそういう男と結婚すべきだ。彼らだったら、決してきみから逃れるようなことはしないよ」(341)と言い、彼女と別れる。ポールの言葉は、ミリアムのかもし出す家庭的雰囲気自身が自身の母親のそれに似ていたとしても、彼が彼女から逃れたいと感じていることを示している。ロレンスが説明しているように、ミリアムはポールに命の通ったあたたかさを与えないし、彼の良心ではあっても伴侶で

はなく、彼が結婚を考えられる相手ではないのだ。ただ、ポールにミリアムとの別れを聞かされたとき、モレル夫人が同意して言う言葉、「それでよかったのよ。彼女には今はつらいでしょうが、長い目で見れば一番いいことね。わたしにはわかります。あなたは彼女には合いません」(344)は、皮肉にもモレル夫人自身の結婚を考えると、彼女自身の結婚生活を否定しているような響きを持つ。

このような両親の結婚に関する矛盾に関してポールは、新しく交際し始めたクララと彼女の夫ドーズ (Dawes) の結婚についてミリアムに話すとき、自身の考えを述べている。ポールは、結婚したものの、クララはドーズと一緒にではやっと半分生きているような状態で、ドーズの方はできるだけクララを愛しているが、馬鹿なのだと考えている。「どこかあなたのお父さんとお母さんに似ているわね」(361)と言うミリアムに対し、ポールは、自身の母親が最初は「本当の喜びと満足」(361)を得たはずだと信じている、と自分の考えを伝えている。ただ、ポールが常に母親の立場を考えていることから、彼が結婚生活で女性を母親と同じ状況に追いやってはならないと考えていることは明らかである。最初は、母親への同情から始まったポールの愛情であったが、しだいに他の女性が入りこめないほどまでにポールは母親に支配されてしまう。ミリアムとクララとの関係において、自分自身を彼女たちに与えることができないというポールにモレル夫人は、「あなたはまだ、自分に合った女の人に出会っていないのよ」(395)と言うが、それに対するポールの言葉、「お母さんが生きていながら、自分に合った女性になんか会わないと思うよ」(395)は、彼が心理的に完全に母親に支配されていることを示している。かつてミリアムと一緒にいたときポールは、「杭に縛られたらばのような気持ち」(404)になる。彼はクララといっても、「自由に深く息をすることもできないような、また何かが頭の上ののっているような監禁状態にあるような気持ち」(403)になる。ポールは、母親に対するかつての父親のように女性に対してなることを恐れるが、カルヴィン・ベディエント (Calvin Bedient) が指摘しているように、母親以外の女性との性交により自分自身

を解放しようとする (Bedient 76)。それは、母親の影響でアイデンティティ・クライシスに陥った自分を救い出す行動と言ってもいい。次の引用は、ポールがクララとの関係において自分自身を解放する様子を示している。

As a rule, when he started love-making, the emotion was strong enough to carry with it everything, reason, soul, blood, in a great sweep, like the Trent carries bodily its black-swirls and intertwinings, noiselessly. Gradually the little criticisms, the little sensations were lost, thought also went, everything borne along in one flood. He became, not a man with a mind, but a great instinct. His hands were like creatures, living; his limbs, his body were all life and consciousness, subject to no will of his, but living in themselves. Just as he was, so it seemed vigorous, wintry stars were strong also with life. He and they struck with the same pulse of fire. (408)

彼が女を愛し始めるとき、彼の感情はほとんど例外なく、あらゆるものを押し流してしまうほど強くなるのだった。——理性も、魂も、血をも——ちょうど、トレント川がその逆波も、もつれ合う波も何もかも、音をたてずに流し去るように、押し流してしまうのだった。彼は心を持った人間ではなく、一つの巨大な本能になってしまった。彼の手は生きもののようだった。彼の手や足も、体も、それ自身の生命と意識を持ちはじめ、ポールの意志に従わず、勝手な行動をとりはじめた。ちょうどその彼と同様の力強い冬空の星も、生命に満ちてたくましく見えた。ポールも星も、同じように火のように脈動した。

ダニエル・J・シュナイダー (Daniel J. Schneider) は、「生が男性の中で流れ燃え上がる。こういったメタファーがこの小説の中で繰り返し現れる」と指摘している (Schneider 146)。引用は、ポールが理性から解放され、本能的になっていることをよく示している。いわば、それは母親の影響で思考や

精神に妨げられていた彼の生命の炎の解放と言ってもいい。ポールが母親から解放されるのは、第2部第14章“The Release”においてである。この章で母親が病気で死に、ポールは解放されるが、母親の影響力は依然として強く、彼女は精神的に闇の中でポールを支えるたった一つのものであり、再び彼は母親が自分と一緒にいてくれることを願う。しかし、作品の最後におけるロレンスの描写、すなわち、「彼は降参したくなかった」、「彼は母のいる暗闇の方角をとろうとはしなかった」(464)は、ポールの心境をよく表している。ポールの場合、彼の存在は常に母親なしには考えられないものであったが、ロレンスのこの最後の描写により、読者は母親なしでも心理的に独立しようとするポールの新たな決意を感じる。かつて女性との関係において、母親の影響ゆえにアイデンティティ・クライシスに陥ったポールであったが、母親の死と新たな決意により、彼は新たな自分、すなわち、母親とは別に存在する自分を発見するのだ。

結 び

オルダス・ハクスリー (Aldous Huxley, 1894-1963) は、ロレンス論“D. H. Lawrence”の中で、「ロレンスが彼の母親に対する愛情および彼に対する母親の過度な愛情によって深い影響を受けたということは、*Sons and Lovers* を読んだ人には、誰でも明白なことである」と述べている。ただその後で、「それにもかかわらず、たとえ子供の頃に母親が死んだとしても、ロレンスはやはり、本質的に根本的にロレンスであっただろうということは、少なくとも、私には、ほとんど同じように明白なことなのである」と付け加えている (Huxley 202-203)。前半部分には妥当性があるが、この付け加えた部分は憶測にしかすぎないと考えられる。なぜならば、成長過程における母親の存在は大きく、その後の人生に多大な影響を与えるからだ。さらに *Sons and Lovers* は、ロレンスの自伝的部分を色濃く反映していることから、母親が生きているがゆえの問題点をそのまま描き出していると考えられるからだ。

本論文では、*Sons and Lovers* において、精神面における母親の支配がい

かに息子をアイデンティティ・クライシスへと追いやるかについて考えてきた。ロレンスは、母親の精神的支配のゆえに、ウィリアムとポールの心理において家庭における父親と母親、労働者階級と中産階級が対立関係にあり、そのことが彼らのアイデンティティ・クライシスに密接に関係していることを示している。ロレンスは、ウィリアムの死後、ポールにも精神面における母親の支配がもたらす悲劇を描いていると言えるが、ポールの場合、アイデンティティ・クライシスは、階級的側面以外の観点からも考えられる。それは、母親とともに存在する自己と母親とは別に存在する自己という二つの自己の間におけるアイデンティティ・クライシスである。ポールは女性との関係において一時的に自分自身を解放するが、母親が生きている限り、そして死後もしばらくは母親の精神面における支配から解放されない。この点でロレンスは、人生の初期に母親を失ってしまう *David Copperfield* のデイヴィッドとは異なるポールの心理状態を描き出している。作品の最後でロレンスはポールの決意を示すことにより、新たな自分を発見するポールを描いていると言えるが、作品全般において彼が母親の精神面における支配から簡単に逃れることができないことを考えると、ロレンスはポールのアイデンティティ・クライシスだけでなく、青年期における母親が与える影響と、成長過程において環境や状況の変化なしに心理的独立をすることがいかに難しいかを明確に示している。このことから、*Sons and Lover* においてロレンスは、孤児の場合とは異なるエディプス・コンプレックスを描き出している、と言ってい

注

1. エドワード・ガーネットは、大英博物館の図書部門助手として働いていた父親の影響で、若い頃から文学的環境の中で育つ。彼は、小説も書いたが、大成せず、アンウィン社、ハイネマン社、ダックワース社などでパブリッシュ・リーダーとして活躍し、ジョウゼフ・コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924)、アーノルド・ベネット (Arnold Bennett, 1867-1931)、ジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy, 1867-1933)、サマセット・モーム (Somerset Maugham, 1874-

1965)ら を 育 て た。1912年、ロレンスとは主に、*Trespasser, Sons and Lovers* などの出版の仕事で関わりを持った。

2. ジェシー・チェインバーズは、ロレンス家と付き合いがあったチェインバーズ家の次女である。1919年、ロレンス15歳、ジェシー14歳のとき二人は出会った。1903年、イルキントンの教員養成所にはほぼ同時期に通い始めてから二人は親密になったが、最終的に二人の関係はうまくいかなくなった。*Sons and Lovers* に登場するミリアムの描写も原因の一つと考えられている。しかしながら、1909年ジェシーが *English Review* の編集者フォード・マドックス・ヘファー (Ford Madox Hueffer) にロレンスの詩を送り、そのことがロレンスが文壇に登場するきっかけとなったので、彼女は、彼の作家経歴において重要人物と言っている。
3. ロレンスとポール・モレルの相違点もある。ロレンスは、グラマー・スクールに行っていたが、ポールは行っていない。ロレンスは学校を出て、最初の三ヶ月しか義肢工場で働いていなかったが、ポールは最後まで義肢を製造する工場で働いている。ロレンスは作家であるが、ポールは画家である (Pittock 56-57)。
4. ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) は、*The Prelude; or Growth of a Poet's Mind* で、母親とおさな児の関係を次のように述べている。

Blest the infant Babe.

(For with my best conjecture I would trace
Our Being's earthly progress,) blest the Babe,
Nursed in his Mother's arms, who sinks to sleep
Rocked on his Mother's breast; who with his soul
Drinks in the feelings of his Mother's eye!

(Wordsworth, *The Prelude* 202)

この詩に見られるようなヴィジョンが *David Copperfield* に見られる。ディケンズは、マードストーン姉弟の介入や母親の死により、無理やり母親と引き離されたデイヴィッドの心境を表すため「母親に抱かれた幸福なおさな児」というヴィジョンを提示している。

5. シュラップ (E. P. Shrubbs) は、「ウォルター・モレルが労働者階級の言語を話す一方で、残りの家族が教養ある中産階級の言語を話している。ウォルターの言語を感情の言語、モレル夫人の言語を思考の言語と考えてもいいくらいであ

- る」と述べている (Srubbs 115)。
6. D. H. Lawrence, *Sons and Lovers* (Harmondsworth: Penguin Books, 1994) 以下、この作品からの引用はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、伊藤整訳『息子と恋人』(河出書房)を参考にした。
 7. *The Criterion* は、イギリスの文学季刊誌であり、1922年10月にエリオット (T. S. Eliot, 1888-1965) がいわゆるハイブロー (high brow) なしろうと雑誌として刊行し始め、1939年2月に廃刊になるまで彼が編集した。二つの大戦の間にあつて新しい文学の紹介につとめ、海外一流の文人から寄稿を得て、異色の功績を残した。
 8. リチャード・オールディントン (Richard Aldington) は、「ジミーのようなインテリは、ロレンスの嫌ったタイプの人間であり、ロレンスがよく知っていた、よく働き、無愛想なイングランド中部地方の人間と対照をなしている」と述べている。また、彼は「ロンドンの編集者が手紙と詩を当てにして炭鉱夫の妻と駆け落ちをすることを望むなんてことはありそうにないが、ジミーのような衝動的で情緒不安定な神経症者に関してはありうることである」と述べている (Aldington 8)。
 9. *Jimmy and the Desperate Woman* の中の炭鉱夫の妻の詩、“The Coal-Miner by His Wife” には、ピネガー夫人が夫のことを次のように表現している。

The burning big pit-hill with fumes
Fills the air like the presence of that fair-haired man.
And the burning fire burning deeper and deeper
Is his will insisting since time began.

As he breathes the chair goes up and down
In the pit-shaft; he lasts as the wheel-fans spin
The sucking air: he lives in the coal
Underground: and his soul is a strange engine.

(D. H. Lawrence, *Jimmy and the Desperate Woman* 102)

この部分には、彼女が夫に引きつけられた要因、すなわち、異質な部分が描かれている。

10. Charles Dickens, *David Copperfield* (New York: Oxford UP, 1989), p 123. この作品からの引用はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部

- 分は、中野好夫訳『デイヴィッド・コパフィールド』（新潮社）を参考にした。
11. Tomas Hughes, *Tom Brown's Schooldays* (Oxford: Oxford UP, 1989), p. 72. この作品からの引用はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、前川俊一訳『トム・ブラウンの学校生活』（岩波書店）を参考にした。
 12. Thomas Carlyle, *Sartor Resartus* (Oxford: Oxford UP, 1987), p. 66. この作品からの引用はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。

作 品

D. H. Lawrence, *Sons and Lovers*. Harmondsworth: Penguin Books, 1994.

参 考 文 献

- Altington, Richard. Introduction to *The Woman Who Rode Away and Other Stories*. Harmondsworth: Penguin Books, 1950.
- Bedient, Calvin. "The Vital Self", *Modern Critical Interpretations: D. H. Lawrence's Sons and Lovers*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Boulton, James T. ed., *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. 1. Cambridge: Cambridge UP, 1979.
- Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus*. Oxford: Oxford UP, 1987.
- Cowan, James C. *D. H. Lawrence: Self and Sexuality*. Columbus: The Ohio State UP, 2002.
- Daleski, H. M. "The Son and the Artist", *Modern Critical Interpretations: D. H. Lawrence's Sons and Lovers*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Dickens, Charles. *David Copperfield*. New York: Oxford UP, 1989.
- Ghent, Dorothy Van. "On *Sons and Lovers*", *Modern Critical Interpretations: D. H. Lawrence's Sons and Lovers*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Hughes, Thomas. *Tom Brown's Schooldays*. Oxford: Oxford UP, 1989.
- Huxley, Aldous. *The Olive Tree and Other Essays*. London: Chatto & Windus, 1936.
- Jackson, Arlene M. "Agnes Wickfield and the Church Leitmotif in *David Copperfield*", *Dickens Studies Annual* 9. Ed. Michael Timko, Fred Kaplan, Edward Guiliano. New York: AMS P, 1981.
- Lawrence, D. H. *Jimmy and the Desperate Woman, The Woman Who Rode Away and*

Sons and Lovers

- Other Stories*. Harmondsworth: Penguin Books, 1995.
- Martz, Louis L. "Portrait of Miriam", *Modern Critical Interpretations: D. H. Lawrence's Sons and Lovers*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Schneider, Daniel J. "The Artist Psychologist", *Modern Critical Interpretations: D. H. Lawrence's Sons and Lovers*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Shrubb, E. P. "Reading *Sons and Lovers*", *Modern Critical Interpretations: D. H. Lawrence's Sons and Lovers*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Wordsworth, William. *Prelude; or, Growth of a Poet's Mind, Selected Poetry*. Ed. Mark Van Doren. New York: Random House, 1950.
- ピトック, マルコム, 「『息子と恋人』—裏切りの代償」, 吹上ナオコ (訳), 『D. H. ロレンス批評地図』, キース・ブラウン (編著), 吉村宏一, 杉山泰他 (訳), 松柏社, 2001.
- 吉村宏一・田部井世志子他 (編訳), 『D. H. ロレンス書簡集Ⅲ 1912』, 松柏社, 2005.
- ワーゼン, ジョン, 『若き日のD. H. ロレンス——ケンブリッジ版評伝』, 木村公一, 島村豊博, 大八木敦彦 (訳), 彩流社, 1997.

Sons and Lovers
**The Dominant Position of the Mother
in the Mind of Her Son
and His Identity Crisis**

YOSHIDA, Kazuho

The purpose of this paper is to show the causal relationship between the family environment and Paul's development, and how the dominant position of the mother in the mind of her son drives him to an identity crisis in *Sons and Lovers* (1913). *Sons and Lovers* was Lawrence's third novel and one of the most highly acclaimed during his lifetime. It was published in May 1913 when he was twenty seven years old, and it did establish his reputation as a novelist. The novel's original title, 'Paul Morel', suggests that Lawrence thought of it as being about only one son, but from the third version onwards William's presence and significance were expanded, and in the final version he is an important role model for Paul. In this novel, Lawrence shows that the father and the mother, and working class and middle class, are in a state of confrontation because of the dominant position of the mother in the minds of William and Paul, which is closely connected with their identity crises. Much of *Sons and Lovers* is taken from Lawrence's own early life: his hero, Paul Morel, grows up near Nottingham in the English Midlands as Lawrence did, and also wants to be a creative artist.

In *Sons and Lovers*, after her marriage to Walter Morel, Mrs. Morel realizes the difficulties of living off his meager salary in a rented house. The couple fight and drift apart, and Walter retreats to the pub after work each day. Gradually, Mrs. Morel's affections shift to her sons beginning with William. As a boy, William is so attached to his mother that he does not enjoy the fair without her. As he grows older, he defends her against his father's occasional violence. Eventually, he leaves their Nottinghamshire home for a job in London, where he begins to rise up into the middle class. He is engaged, but he detests the superficiality of Lily, his girlfriend. He dies and Mrs. Morel is heartbroken, but when

Paul catches pneumonia she rediscovers her love for her second son. The centre of the novel is the relationship between Paul and his mother: he loves her and needs her to help him make sense of the world around him, but in order to become an independent man and a true artist he has to make his own decisions about his life and work, and has to struggle to become free from her influence. Paul needs to put the outer and inner world together in a true relation. Lawrence shows how the daily life of his characters influences them, but he is concerned to express the inner qualities of human nature.

Lawrence represents that Paul experiences a tragedy which the dominant position of his mother brings after William's death. After William's death, Paul's relationship with their mother echoes his brother's in many respects: the bringing home of prizes for her, the flirting banter, the promises never to marry, the discussions about his unsatisfactory girl-friends and so on. In the case of Paul his identity crisis can be considered from the viewpoint of the self which exists with his mother and the self which is independent of his mother. Paul tries to release himself from his mother in the relationship with the women, but he cannot escape from the dominant position of his mother until his mother dies and for a while after the death of his mother. In the ending of the story, Lawrence represents Paul who finds a new self by showing strong determination. In *Sons and Lovers*, Lawrence shows the influence of a mother on her son in his youth and that her son cannot be psychologically independent of his mother in his development easily without the changes of his environment and circumstances; Lawrence represents the Oedipus complex which is different from that of an orphan.